



大学生の読書行動：札幌校での実態調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, まり, 田辺, 園枝, 森實, 祐里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006905

大学生の読書行動

— 札幌校での実態調査から —

戸田 まり・田辺 園枝*・森實 祐里**

北海道教育大学札幌校発達心理学研究室

*札幌市立厚別南中学校

**札幌市立大倉山小学校

Reading Behavior in Undergraduates

— From the Research in Sapporo Campus —

TODA Mari, TANABE Sonoe* and MORIMI Yuri**

Department of Developmental Psychology, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Sapporo Atsubetsu-minami Junior High School

**Sapporo Okurayama Elementary School

概 要

本学札幌校学生の読書行動の実態を調べるために質問紙調査を行った。1ヶ月に一冊の本も読まないいわゆる「不読率」は39.9%であり、先行研究と似た水準にあった。文章主体の電子書籍はあまり読まれていなかった。不読層は読書の目的として「内容を楽しむ」、「興味関心を深める」、「新しいことを知ったり調べたりする」といった内発的動機づけや知的好奇心にもとづく点を指摘しない傾向にあった。大学でよく本を読む者は高校時代もよく読んでいた傾向があるが、小学校時代の読書頻度とは関連しなかった。

問題と目的

読書の意義

読書は、言葉を通して知識や他者の考えを得、現実にはできない状況を追体験でき、それによって自らの思考や感情、感性を広げることのできる営みである。読書活動の推進は小学校から高校ま

ですべての学習指導要領に唱われており、平成13（2001）年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されている。ここでは読書の意義が「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないもの」として位置づけられている。

読書することは学力の向上に結びつく。全国学力・学習調査のデータをもとにした検討では、読書好きさと教科の学力との間には強い関係があり、読書好きである方が学力が高かった。ただし学力の低い層に限ると、平日の長時間の読書がかえって学力の低さと関連しており、この層では読書時間も長いが睡眠やゲーム、ネット時間も長いことが指摘された。つまりひとつに集中せず平行して様々な活動に長時間費やしているような場合が想定され、読書のあり方も学力と関係することが示唆される（静岡大、平成21年度）。小学校高学年を対象に実際の読書履歴をもとに検討した研究では、読書量が多いほど学力テストの成績の伸びが大きい（ベネッセ、2018）、小説に限らずノンフィクションや評論など様々な種類の本を読むほど学力が伸びている（ベネッセ、2019）などの知見が示されている。猪原ら（2015）でも小学生全体として読書量の多さが語彙力や文章理解力の高さと結びつくことが見いだされた。

子ども時代の読書のあり方が成人して以降の意識や意欲に影響を及ぼすことも指摘されている。濱田ほか（2016）は20代から60代までの成人に大規模web調査を行い、子どもの頃の読書量や読んだものの多様性などの充実が、成人の自己肯定感や向上心といった意識・意欲・行動に影響を及ぼすことを見いだした。40代・50代では子どもの頃の読書の充実が個人年収に正の影響を持つことも示された。

読書行動の現況

行動や意識など多くの側面に肯定的な影響を与え得る読書であるが、人は一般にどの程度、本を読むのであろうか。多くの調査から、小学生が最も多くの本を読むことが一貫して示されている（深谷、2019）。過去1ヶ月間にまったく本を読まない人の割合である「不読率」については近年、様々な調査で同様の数値が上がっている。浜銀総合研究所（2017）のデータでは小学生4年生の7.4%から高校2年生（普通科高校の生徒）の35.7%まで年齢を追うごとに上昇している。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年行っている

学校読書調査でも、令和元年度の小学4～6年生の不読率は6.8%、中学生は12.5%に対し、高校生では55.3%である（全国SLA研究調査部、2019）

成人については4～5割が1ヶ月に一冊も本を読まないと推測される。文化庁が全国16歳以上の男女約2000名にたずねたデータでは、平成20（2008）年度から令和元（2019）年度まで、1ヶ月に1冊も読まない不読率はおおむね46～48%で一定であった（文化庁、2019）。立田（2016）が国際成人力調査（PIAAC）のデータを分析した結果では、20代以降の日本人の不読率は概ね30%台の前半であった。成人の中で大学生は、旧来はよく読書する層であったが、平成に入ってから読む力があるにもかかわらず本を読まない不読層が増加したことで注目されている（藤森、2019）。平山（2015）が計3000名余りの大学生にたずねた調査では、不読率は2006年から2012年にかけて33.6%から40.1%に増加していた。また浜島（2019）が全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」を分析したデータでは、2013年の大学生不読率が40.9%だったのに対し、5年後の2017年には53.9%に上昇していた。これらを総合すると大学生は近年ますます本を読まない傾向にあると言える（表1）。

表1 各年齢層、年代での1ヶ月の不読率

出典	調査年	不読率(%)	対象
文化庁(2019)	2019	47.3	16歳以上の男女
立田(2016)	2011～12	22.6	16～19歳
立田(2016)	2011～12	32.5	20～24歳
立田(2016)	2011～12	31.3	25～29歳
立田(2016)	2011～12	31.4	30～34歳
平山(2015)	2006	33.6	大学生
平山(2015)	2012	40.1	大学生
浜島(2019)	2013	40.9	大学生
浜島(2019)	2017	53.9	大学生
全国SLA研究調査部(2019)	2019	55.3	高校生
浜銀総合研究所(2017)	2017	35.7	高校2年生
浜銀総合研究所(2017)	2017	29.7	高校1年生
全国SLA研究調査部(2019)	2019	12.5	中学生
浜銀総合研究所(2017)	2017	18.9	中学2年生
浜銀総合研究所(2017)	2017	14.1	中学1年生
全国SLA研究調査部(2019)	2019	6.8	小学4～6年生
浜銀総合研究所(2017)	2017	8.0	小学5年生
浜銀総合研究所(2017)	2017	7.4	小学4年生

本学は教員養成大学であり、小・中学校などの教員をめざす学生が多い。小学校はもとより、教員であれば国語科以外でも学校において読書指導を行う機会はあるだろう。本研究ではそうした教員をめざす学生がどの程度本を読んでいるのか、どのような動機で、どんな目的で読むのか、紙の本以外の電子書籍などはどの程度読まれているのかといった実態を把握し、読書行動を促進あるいは阻害する要因について探ることを目的とする。

方 法

調査対象

本学札幌校の学部学生160名（男性52.2%，女性47.8%）。1年26.1%，2年5.7%，3年59.9%，4年8.3%と、3年生の多いサンプルであった。

調査方法

授業を通じて協力を求めた。質問紙は無記名であり回答は自由であること、回答したくない場合は拒否することができ、そのことで不利益はないことを口頭で説明した。

調査内容

- ①最近の活字等との接触時間 浜銀総合研究所(2017)の質問形式に則り、「紙の本」,「紙のマンガ・雑誌」,「電子書籍」,「電子書籍のマンガ・雑誌」,「ネット上の個人のエッセイや小説,ニュース等(電子書籍の形になっていない文章)」の5つについて、平日と休日に分け、それぞれ最近一日どのくらい読むかについて「0分」から「4時間以上」までの6段階評定を求めた。
- ②過去1ヶ月間の読書冊数 「この一ヶ月に読んだ本」の冊数の記入を求めた。
- ③過去1ヶ月間に読書以外で行った余暇活動 「勉強」,「部活・サークル活動」など12項目について有無をたずねた(図4参照)。
- ④読書のきっかけ 浜銀総合研究所(2017)の質問項目を使用し、「誰かが一緒に図書館や本屋に行く」,「友人が勧めたり貸してくれる」など11項目についてあてはまるか否かをたずねた(図6参照)。なお児童・生徒向けの文言は大学生が回答

できるように同じ意味の言葉に置き換えた(例:「学校の図書館」→「大学図書館」)。

- ⑤読書の目的 浜銀総合研究所(2017)の質問項目を使用し、「本の内容を楽しむため」,「興味・関心を深めるため」など8項目についてあてはまるか否かをたずねた(図7参照)。児童・生徒向けの文言は大学生にとって不自然でない文言に置き換えた(例:「ことばを使う力」→「言語能力」)
- ⑥過去の読書経験 就学前,小学校時代,中学校時代,高校時代の4区分について、それぞれの程度本を読んでいたかを、「とてもよく読んだ」から「ほとんど読まなかった」の4段階で尋ねた。
- ⑦小学校時代の開放図書館の有無 在席した小学校に司書がいる開放図書館が設置されていたかどうかをたずねた。

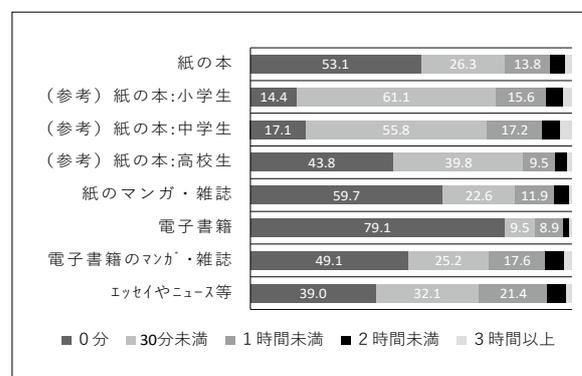
調査時期

2019年11月～2020年1月。

結 果

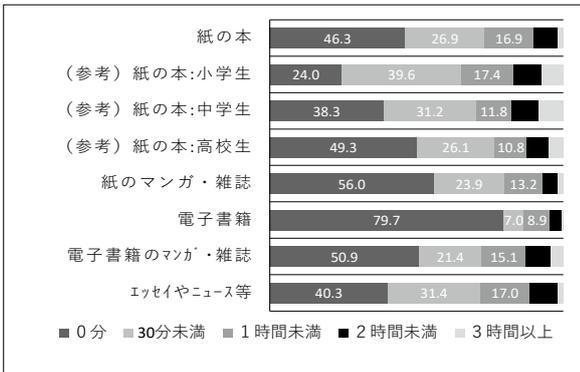
1. 大学生の読書行動

図1と2に平日と休日の本や電子書籍との平均的な接触時間を示す。平日も休日も大きく数値は変わらず、「いつもは一日に平均して『紙の本』を読むのは0冊」という者が約半数であった。また「紙のマンガ・雑誌」は「紙の本」よりも接する時間が少なく、半数以上が平日も休日も読んでいない。電子書籍はさらに少なく0分の者が約8割であり、まださほど普及していないことがうか



注) (参考)は浜銀総合研究所(2017)のデータ

図1 平日の読書活動



注) (参考) は浜銀総合研究所 (2017) のデータ

図2 休日の読書活動

がわれる。しかし「電子書籍のマンガ・雑誌」は30分以上読む者が2～3割となり、「ネット上の個人のエッセイや小説、ニュース等」を30分以上読む者も平日休日を問わず3割程度存在する。図1, 2の(参考)は浜銀総合研究所(2017)による小学生から高校生までの同一質問に対する回答を表す。「紙の本」についての比較のみだが、本学学生の読書行動は、高校生の平均的な読書行動と同様であった。

図3は「この1ヶ月に、マンガ・雑誌・教科書類を除く本を何冊読みましたか」に対する回答である。電子書籍の本は含むものとしている。1ヶ月の不読率に当たる「0冊」は全体で39.9%であった。6割の学生は紙か電子かを問わず1ヶ月に1冊以上の本を読んでいることが示された。また10冊以上読んでいる者は1.8%であった。

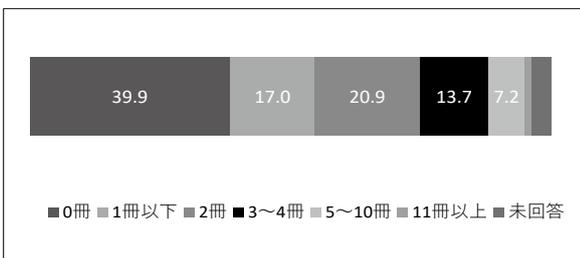


図3 1ヶ月の読書冊数

2. 読書のきっかけと目的

表2は読書のきっかけについて尋ねた質問への回答である。大学生で最も多かったのは「知りたいことがある」で半数を超えている。この項目は

先行研究の小中高校生が30～35%の選択率であるのに対し本研究の大学生で多い。また「作家に興味・関心をもった」も高校生までの選択率は30%程度であり本研究の大学生で高くなっている。その他今回の大学生の選択では「本屋での宣伝やマスコミ等の広告」、「友人が勧めたり貸してくれる」がそれに次いでいるが、これらは先行研究の小中高校生とは大きな差異が無い。また小学生では50%以上で「誰かが図書館や本屋に一緒に行く」ことがきっかけとなるのに対し、大学生では13.3%に留まっており、大学生が本を読むきっかけは主として「読んでみたい」という自発的、内発的な動機づけが大きいと考えられる。小学生を除き、地域の図書館が身近にある、あるいは教科書等で本が紹介されていても、読書のきっかけとはなりにくい。

表2 本を読むきっかけ (%)

本を読むきっかけ	本研究		先行研究 ^{注)}	
	大学生	高校生	中学生	小学生
誰かが一緒に本屋等に行く	13.3	22.0	37.6	51.1
家で手近に本がある	24.1	16.0	26.2	43.6
友人の勧めや貸し	37.3	32.9	38.8	36.7
先生の勧め	22.2	5.3	5.6	15.5
大学図書館(学校の図書館)	27.2	3.9	7.6	18.4
地域の図書館が身近	8.2	6.1	7.8	19.0
教科書等での紹介	10.1	4.3	6.3	19.8
宣伝広告	37.3	54.7	44.1	28.1
作家に興味・関心をもった	41.8	30.7	26.4	20.2
知りたいことがある	50.6	33.2	31.8	34.7
その他	10.1	4.4	6.3	5.3

注) 浜銀総合研究所(2017)のデータ

読書の目的をたずねた結果を表3に示す。すべての年代で「内容を楽しむ」ために読書する者が7～8割と最も多い。大学生では「興味・関心を深める」「宿題や課題で読む必要がある」が次いでいるが、中・高校生で宿題等の学習のために何かの本を読むことはさほど多くないと推測される。

また、大学生では資格や将来の仕事のために本を読む者が2割程度あるが、小中高校生で「成績

を上げる」という目的で本を読む者は少ない。逆に「気分転換やひまつぶし」として本を読むものが大学生では下の世代に比べてやや少ないと言える。

表3 本を読む目的 (%)

本を読むきっかけ	本研究		先行研究 ^{注)}	
	大学生	高校生	中学生	小学生
本の内容を楽しむため	76.6	81.3	80.4	72.3
興味・関心を深めるため	51.3	35.6	35.7	43.8
気分転換やひまつぶし	40.5	56.1	65.4	60.4
知らないことを調べたり知る	36.1	20.3	24.1	45.9
言語能力や思考力を高める	22.2	19.6	22.4	28.7
資格や将来の仕事のため (小・中・高)成績を上げるため	23.4	4.3	7.3	14.5
宿題や課題で必要がある	43.0	11.8	9.8	22.7
その他	0.6	2.1	4.7	4.3

注) 浜銀総合研究所(2017)のデータ

3. 読書以外の活動と1ヶ月の読書冊数

読書以外の余暇活動についてたずねた結果を図4に示す。79.7%のアルバイトが最も多く、ついで睡眠、SNS、ネット動画、友人づきあいの順となった。勉強、部活・サークル活動、テレビ・ビデオ、趣味、ゲームを行う者はそれぞれ半数程度であるが、SNSやネット動画、あるいはゲーム以外でインターネットを見るのは2割程度に留まっている。

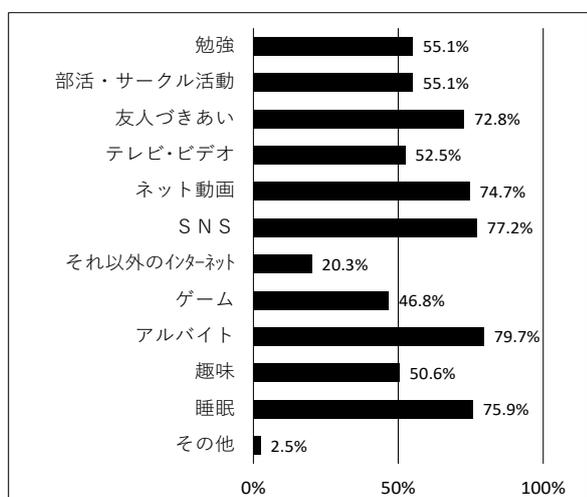


図4 読書以外に行った余暇活動

次に図3に基づき1ヶ月に読んだ冊数を「0冊」、「1～2冊」、「3冊以上」の3群に分け、上記の余暇活動との関連を調べた。読書冊数と有意な関連が認められたのは「テレビ・ビデオ」のみであり(図5)、1ヶ月にまったく本を読んでいる群でテレビやビデオを見ている割合が低かった($\chi^2=6.08$, d.f.= 2, $p<.05$)。他の活動、たとえば友人づきあいやSNS、ゲームなどを余暇として行ったり、勉強しているか、アルバイトに励んでいるかどうか等は、読書冊数と一切関連が見られなかった。

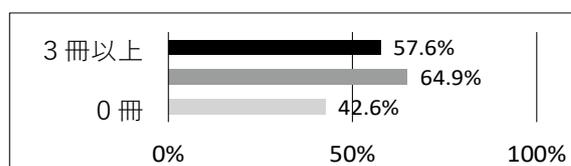


図5 読書冊数別に見た余暇でのTV・ビデオ視聴

4. 読書のきっかけや目的と1ヶ月の読書冊数

同様に1ヶ月の読書冊数と、読書のきっかけ(図6)との関連を検討した。1ヶ月の読書冊数と有意な関連が見られたきっかけとしては以下の項目が挙げられた。「作家に興味・関心がある」($\chi^2=7.10$, d.f.= 2, $p<.05$)では1～2冊、あるいは3冊以上読む群に比べ、まったく読まない0冊群で選択が低かった。「(本屋やマスコミなどの)宣伝や広告」($\chi^2=7.96$, d.f.= 2, $p<.05$)が読むきっかけとなるとした者は、0冊群と3冊以上群では選択が低く、1～2冊群で高いという結果になった。「大学図書館がある」($\chi^2=24.02$, d.f.= 2, $p<.001$)は、月に3冊以上の本を読む群でよく選択されており、多くの本を読む場合に学内にある図書館が利用されていることが示唆された。「友人が勧めたり貸したりする」($\chi^2=4.63$, d.f.= 2, $p<.10$)は有意傾向に留まるが、1～2冊群のみが他に比べて低くなっている。「先生が勧める」「教科書等で紹介されている」などのきっかけはいずれもあまり選択されていない。

1ヶ月の読書冊数と読書の目的との関連では、複数の項目で同様の傾向が見られた(図7)。「本

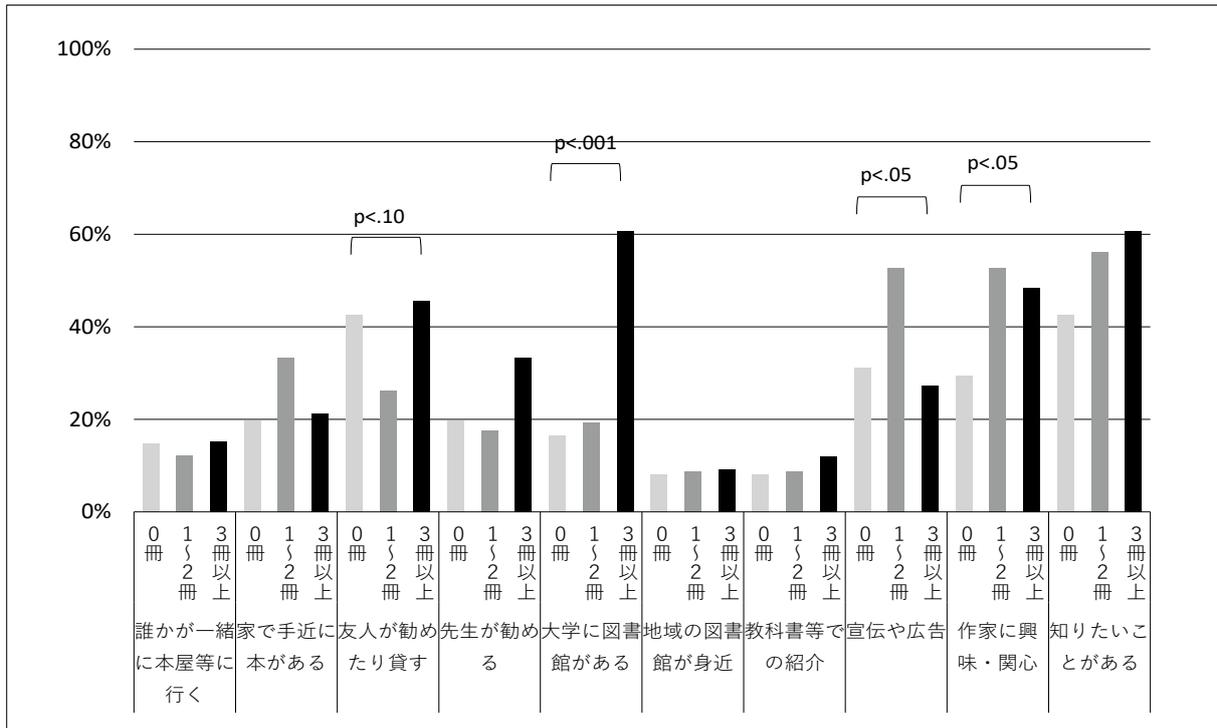


図6 読書冊数別に見た読書のきっかけ

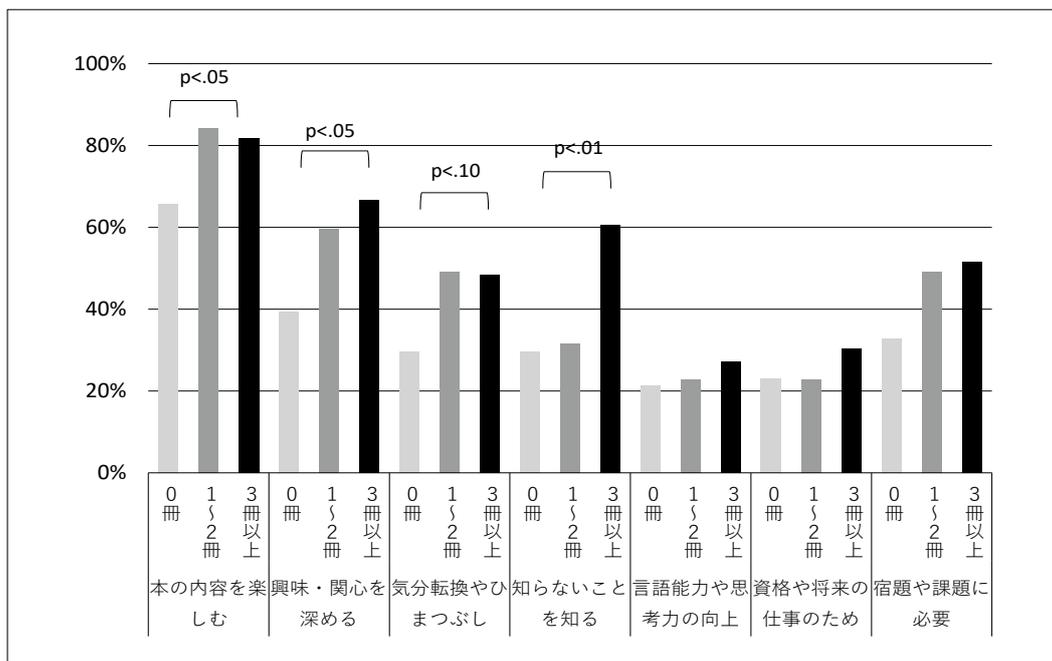


図7 読書冊数別に見た読書の目的

の内容を楽しむ」($\chi^2=6.38$, $df=2$, $p<.05$), 「興味・関心を深める」($\chi^2=8.05$, $df=2$, $p<.05$) で有意差が見られ, いずれも月に0冊の群がこうした目的を持ちにくいことが示された。「気分転換・ひまつぶし」($\chi^2=5.65$, $df=2$, $p<.10$) は有意傾向ではあるが, やはり0冊群の

み選択率が低い傾向にある。「知らないことを(新しく)知る」($\chi^2=10.07$, $df=2$, $p<.01$) では3冊以上の群だけが選択率が高かった。「言語能力や思考力を高める」, 「資格や将来の仕事のため」, 「宿題や課題で必要」という理由で読書することは, 読む冊数とは関連が認められなかった。

5. 過去の読書体験と1ヶ月の読書冊数

では大学生は子ども時代から今までにどの程度読書してきたのだろうか。「それぞれの時期でどのくらい本を読みましたか」に対する回答を図8に示す。なお就学前については参考値である。これは自分で読んだ場合と読み聞かせを聞いた場合があり、回答者によってその解釈がまちまちであったために本との接触全体を反映しているとは言えないからである。小学校以降については学年が進むほど本を読まない傾向にあることが示された。高校時代には7割以上が「あまり／ほとんど読まなかった」と答えている。

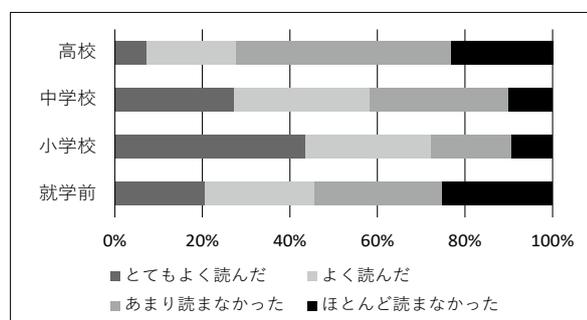


図8 過去の読書体験

過去の読書体験の影響を調べるため、4段階評定でたずねた回答「ほとんど読まなかった」から「とてもよく読んだ」までを1～4点と点数化し、それぞれの時期の読書得点とした。理論上の中央値は2.5点で、得点が高い方がよく読書していたことを表す。これら読書得点の平均値を、現在の1ヶ月の読書冊数別に示したのが表4である。

就学前は既に述べたように参考的な数値である

表4 現在の読書冊数別に見た読書得点の平均(SD)

現在の読書冊数	就学前	小学校	中学校	高校
3冊以上	2.15(1.09)	2.94(1.03)	2.82(0.88)	2.33(0.85)
1～2冊	2.72(1.06)	3.28(0.98)	2.93(1.03)	2.32(0.89)
0冊	2.26(1.03)	2.93(1.03)	2.56(0.94)	1.82(0.72)
	F = 4.01*	n.s.	n.s.	F = 4.59**
	1～2冊 > 3冊以上			1～2冊, 3冊以上 > 0冊

が、現在、1ヶ月に一冊も本を読まない大学生は、高校時代にもあまり読まない傾向にあったことが示された。中学、小学校時代の読書体験とは関連が認められなかった。

また、各時期の読書得点同士の関係を調べるためスピアマンの順位相関係数を算出した(表5)。就学前(参考値)と小学校、中学校の間、および小学校と中学校の間、さらに中学校と高校の間に有意な正の相関が得られたが、小学校時代によく本を読んでいたことと、高校以降に本を読むかどうかとは関連が見られなかった。

最後に通った小学校に司書を配置した開放図書館があったかどうかをたずねたところ、「あった」が30.4%、「なかった」は42.4%、「わからない・覚えていない」が27.2%であった。これらのグループ間で現在の読書冊数、各時期の読書体験が異なるかどうかを調べたが、何の関連も認められなかった。

表5 読書体験間の順位相関係数

	小学校	中学校	高校
就学前	.63**	.26**	n.s.
小学校	-	.55**	n.s.
中学校	-	-	.52**

** : p < .01

考 察

本学学生は4～5割があまり本を読んでいないという結果となった。「最近のあなたは」とたずねた場合に「紙の本を読まない(0分)」との回答が5割、過去1ヶ月の読書冊数をたずねたときに「0冊」と答えたものが4割であった。先行研究でも近年になるほど大学生の不読率は上がっている(表1参照)。直近の先行研究(浜島, 2019)よりは低いものの、2000年代や2010年代前半よりも高くなっている。本研究のデータにおいて紙のマンガや雑誌もあまり読まれていなかったことを勘案すると、いわゆる「紙に印刷された冊子体」全般から学生が離れていることがうかがわれる。

マンガ・雑誌は電子書籍の形では比較的読む者が多い。これらが金銭を払って得ているものか、それともネットで無料で見られるものに限られているのかについては調査できなかった。文章主体の電子書籍はあまり読まれておらず、まだ普及には至っていないことがうかがわれる。ただしネット上の個人のエッセイやニュース等は電子でのマンガ・雑誌以上に読まれている。これらから考えると、1冊のまとまった本を読むという行為は低下しているが、個々の文章などをコンテンツ単位で読むことは増えているのかもしれない。紙の本および文章主体の電子書籍に費やす時間が比較的少ないこと、よく接触しているSNSも通常は短めの文章でのやりとりが主体であること考えると、現代の大学生は1冊の本のような長いひとまとまりの記述から総合的な情報を得るというよりは、短く区切られた断片的な文字情報を多く得ることを好む傾向があるのかもしれない。また動画や画像など視覚的な情報をより好み、文字だけの情報を受け取って理解することが苦手な層が出てきていることも考えられる。

余暇に何をしているかは、読書行動とあまり関係しなかった。ネット動画を見たりSNSに興じたりする時間が多くなれば、あるいはサークル活動やアルバイトで時間を取られれば読書に割く時間が少なくなるだろうと予測したが、そのような結果は得られなかった。唯一、「テレビ・ビデオを見る」者に1ヶ月の読書冊数が多いという結果が得られたが、これについても予想と逆の関連であり解釈は難しい。ドラマの原作を読む、あるいは原作の本に関心を持ってドラマ化された番組を見る、などのメディアを越境した効果があるのかもしれない。余暇活動ではアルバイトや友人つきあいといった現実の営みと並んで、ネット動画やSNSが7割以上選択されていた。そして動画やSNSに興じることと読書冊数とは関連が認められなかった。本をよく読む者もあまり読まない者も等しくインターネットには接しており、読書することあるいは不読に影響するのはインターネット接触とは別の要因であると考えられる。

何らかのきっかけによって読書冊数が増加するあるいは減少するといった傾向は必ずしも認められなかった。読書冊数によって関連が見られた項目はいくつかあるが、関連の方向性は一定でない。多くの本を読む者にとって大学図書館は大きな役割を果たしていると言えるが、教員の推薦やテキスト内で紹介される図書については多くの学生があまり読まない傾向にある。参考図書を読んで欲しいときには推薦や提示の仕方について工夫する必要があるだろう。

読書の目的は読書する層としない層で一定の異なる傾向が見られた。よく読書する層は、「内容を楽しむ」「興味関心を深める」「新しいことを知ったり調べたりする」といった内発的動機づけや知的好奇心にもとづく点を多く挙げていた。1ヶ月に1冊も読まなかった不読層はこうした点をあまり挙げておらず、本によって知的好奇心を刺激されることになじんでいないと考えられる。不読層は「気分転換やひまつぶし」も選択率が低く、そもそも自分の活動の中に読書という行為が位置づいていないのかもしれない。資格や将来の仕事、言語能力や思考力を高めるなどの実利的な目的はあまり選択されず、読書冊数とも関連しない。大学生に読書を促すにはやはり彼らの知的好奇心を刺激し、内発的動機づけに届くような働きかけが有効ではないかと示唆される。

子ども時代の読書行動は、今回たずねた限りでは現在の読書行動と関連しなかった。高校時代の読書行動は大学での読書行動と結びつき、高校時代からよく本を読んでいた者は大学でも読書冊数が多かった。しかし小学校の時によく読んだ者が大学でもよく読書するわけではない。隣り合った時期には相関があるが、離れた時期とは関連が認められない。小学校に司書を擁する開放図書館があったかどうかはどの時期の読書行動とも結びつかなかった。今回の調査では開放図書館の有無の記憶があいまいな者が4分の1を占めたこと、各開放図書館やそれを擁する学校の方針が必ずしも一様でないことがあり、はっきりした影響が認められなかったものと思われる。

本研究のサンプルは大学全体を代表するものではなく、この数値を一般化することはできない。また調査の際に学修のための読書と私的な楽しみのための読書が分離できていなかったため、そのことが結果に影響を及ぼした可能性がある。しかし、調査協力者全体の4割が1ヶ月に1冊も本を読んでいないという事実は高等教育機関である大学として考慮しなければならない事態ではないかと思われる。このことが学修や、学生の人生全般にどのような影響を及ぼすかは今後より詳細に検討していかなくてはならないだろう。まとまったテーマでの長い記述を読み正確に情報を獲得する、そこからまた新たな考えを紡いでゆくといった営みは人間の知的活動にとって不可欠である。活字を読む習慣のない層、あるいは苦手な層には、ただ本を推薦するだけでなく、読書という行為に取り組めるような何らかの働きかけを考える必要がある。

引用文献

- ベネッセ 2018 読書が算数の学力に影響?—読書量と学力の関係を考える
<https://benesse.jp/kyouiku/201812/20181220-1.html>
 (2020年3月11日閲覧)
- ベネッセ 2019 ニュースレター 幅広い読書が「思考力」や「創造性」にプラス効果
https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/bigdata/20191025manabilnewsletter.pdf (2020年3月11日閲覧)
- 文化庁 2019 平成30年度「国語に関する世論調査」の結果の概要
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodo_happyo/_icsFiles/afieldfile/2019/10/24/a1422163_02_1.pdf (2020年3月12日閲覧)
- 藤森裕治 2019 大学生・成人の読書と生涯発達 日本読書学会(編) 読書教育の未来 ひつじ書房 73-81.
- 深谷優子 2019 児童期における読書 日本読書学会(編) 読書教育の未来 ひつじ書房 39-48.
- 濱田秀行・秋田喜代美・藤森裕治・八木雄一郎 2016 子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響—世代間差に注目して— 読書科学 58, 1, 29-39.
- 浜銀総合研究所 2017 子どもの読書活動の推進等に関する調査研究 報告書 平成28年度文部科学省委託調

査

- <https://www.kodomodokusyo.go.jp/happyo/datas.html?page=3> (2020年3月13日閲覧)
- 浜島幸司 2019 読書習慣のない大学生の特性と傾向 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 9, 77-88.
- 平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化—2006年調査と2012年調査の比較より— 読書科学 56, 2, 55-64.
- 猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子・小山内秀和 2015 複数の読書量推定指標と語彙力・文章理解録との関係—日本人小学生児童への横断的調査による検討— 教育心理学研究 63, 254-266.
- 静岡大 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 C 読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究 平成21年度文部科学省委託調査研究
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/02/17/1344295_005.pdf (2020年3月11日閲覧)
- 立田慶裕 2016 青年の読書活動—生涯学習の視点から— 社会教育 71(1), 26-34.
- 全国SLA研究調査部 2019 第65回学校読書調査報告 学校図書館 829, 16-53.

謝 辞

本研究にご協力いただきました平野直己先生、幸坂健太郎先生、および調査協力者の学生の皆様に深く感謝いたします。

付 記

本研究は令和元年度大学院「発達心理学特別演習」(担当教員は第一著者)の一環として行われた。

- (戸田 まり 札幌校教授)
 (田辺 園枝 札幌市立厚別南中学校)
 (森實 祐里 札幌市立大倉山小学校)